

士郎の夢

ポケモンっほい人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある少年の、運命を観るお話

目次

見果てぬ夢

桜の花びらが、舞っている

「、、約束通り、来れて良かったな、、」

『桜を見に行く』という、彼女と交わした、大切な約束、、

「はい、先輩」

「、何だ？桜」

「、有難う御座います、約束、守ってくれて」

「、ああ、約束、だからな」

桜が、胸を預けてくる

「、、夢みたいですね、先輩」

「、、そうだな、、本当に、夢みたいだ」

そうして、衛宮士郎の聖杯戦争は、終わりを迎えた

ビュウオオオツ

急な突風が吹き荒れた、

花卉が盛大に舞い飛び、俺と桜を包む、、

サアア、

風が止んだ時――

「ツ――桜？」

俺の前から、桜は居なくなっていた、

その代わり、

「……」

何処かで見たとような、小さな子供が、俺の前に、立っていた。

「、お前は、」

「おれは、おまえだ。」

そして、これはおれのゆめなんだ。」

『夢』と、子供は、そう言った、

、、ああ、、、そうか、、これは、『まだ』夢だったのか、、

「、、もう、、、起きる時間なんだな？」

「うん。」

、、また、ゆめをみるために、、このゆめは、ここでおしまい。」

「そうか、お前も、何時か見れると良いな、」

叶うのなら、、彼女に会える『未来』になればと、そう願って――

おれは、めをあけた

――そう、あれは、おれの『ゆめ』だ。

「ごうごうごうと、木がもえて、
めらめらめらと、家がやける。

しってるひとも、しらないひとも、みんなみんな、たおれてる
これが、おれの『げんじつ』

おれのじかんは、あのときから、なにも、うごいていない。
そらにある、まっくろなおひさま、

、そのせいで、おれの『みらい』はなくなった。

だから、おれは『ゆめ』をみることにした。

『せいぎのみかた』にすくわれて、

『おうさま』をおいかけたり、

『ししょう』ととおくにいたり、

『ごうはい』をたすけたりした。

、それは、とつてもたいへんだったけれど、たのしかったゆめ。

、ああ、『まっくろなひと』は、ちよつとこわかったけど、

「、、また、ねむくなつてきた、、」

、、こんどは、どんなゆめをみれるかな、、

いまみたいにな、すこしちがうゆめかな、、

もしかしたら、『おねえちゃん』としあわせになれるかもしれない。

もしかしたら、『おにいちゃん』になるかもしれない。

ああ、もしかしたら、『とらのおねえちゃん』かな？

『おほしさま』も、いいかもしれない。

『しんぷさん』も、『おじいさん』も、ちよつと、こわいけど。

「おやすみ——なさい……」

、、かの少年は独り、、炎の海にて夢を観る、
例え、それが夢幻のものであったとしても、、
その少年の未来は——

無限の可能性で、出来ていた